

## 鮎川哲也『ペトロフ事件』に観察される、旧満洲地域における「日中ピジン」

岡田祥平

第2次世界大戦以前の旧満洲地域では、日本語と中国語のピジン言語(Pidgin)・混合言語(以下、便宜的に「旧満洲地域における「日中ピジン」と表記)使用されていたようである。近年の日本語研究においては、種々の資料に見出せる、旧満洲地域における「日中ピジン」が報告がされるようになり、その実態も明らかになりつつある。本発表ではそのような研究の流れを受けつつ、先行研究では触れられていない資料に観察された旧満洲地域における「日中ピジン」の用例を紹介し、聴衆のみならずと議論を深め、この分野の研究における新たな展開の可能性を模索したい。

本発表で紹介する資料は、鮎川哲也『ペトロフ事件』(の初期バージョン=現在は入手が難しいバージョン)である。当該作品の作者の鮎川は、9歳から25歳まで旧満洲地域の大連に住み、その間、旧満洲地域内を頻りに旅行していた。また、「言語」に関する関心が非常に高い作家でもある(鮎川発表した作品の中には、日本語学、日本語方言学の点から興味深いトリックが使用されているものも存在する)。そのような鮎川が執筆した当該作品からは、旧満洲地域における「日中ピジン」について、以下のような点が読み取れる。

まず、雑貨店の女主人(日本人)が店員の少年(満人)に対する発話から、旧満洲地域における「日中ピジン」の実態を垣間見ることができる。同時に、その発話に対して付された地の文の解説から、旧満洲地域における「日中ピジン」に対する当時の評価や、旧満洲地域における「日中ピジン」の使用者の意識もうかがい知ることができる(なお、鮎川は、旧満洲地域における「日中ピジン」のことを「日満合弁語」と称している)。

また、店員の少年の発話には、「奥サン、アナタ黙ツテル宜シ」「大丈夫アルヨ」といった用例も観察される。これらの用例は、中国人を表象する「役割語」の中に観察される、「よろしい」語法や「ある」語法(金水敏『コレモ日本語アルカ?—異人のことばが生まれるとき』・岩波書店・2014年も参照)を考える際にも重要であろう。